

最優秀賞

かわいそうじゃない

吉見町立南小学校 5年

田村 夏鈴

私は、しょう害がある人が苦手だ——

四年生のとき、「ふくし」の勉強をした。そして、ふくしとは、「ふだんの、くらしの、しあわせ」という意味だと知った。私は、毎日、しあわせにくらしてると思う。学校に通える、友だちと遊べる、好きな習い事もできるし、しょう害があるわけでもない。だから、しょう害がある人はかわいそうだと思う。しかし、福祉の授業で、車いすにのって生活している方が来たときに、「かわいそうだと思わないでほしい。」と言っていた。「私は、しあわせだから。」と。私は不思議に思い、モヤモヤした気持ちでいっぱいになった。

家に帰り、お母さんに聞いた。すると、お母さんにまで、「かわいそうって思わない方がいいよ。」と言われてしまった。何か、私が悪いとみんなに言われているようだった。「なんでそんなこと言われなくちゃいけないの。」と言いたかったけれど、言ったところで何も解決しないことは分かっていた。だから、だまってお母さんの話が終わるのをまった。さらにモヤモヤした気持ちでいっぱいになった。

このモヤモヤは何なのだろう。なんでかわいそうだと思ってはいけないのだろう。私は、「かわいそう」な人には、優しくしようと思うから、かわいそうだと思われることは別に悪いことではないと思う。

お父さんが帰宅した。私は、お父さんに自分の考えを伝えた。すると、「Aは、かわいそうだから助けてあげると言われて手伝ってもらったと思う。」と聞いてきた。私はそこまで考えていなかった。「そりゃ、いやな気持ちになるな」と思い、黙った。お父さんは続けて、「かわいそうと言われるより、がんばれと言われた方がうれしいんじゃないかな。」と言った。私はドキッとした。その通りだと思った。

ふだんのくらしのしあわせ。これは、しょう害があるなしに関係なく、本人も周りの人もみんなが一緒になって作っていくもの。そこには、かわいそうじゃなくて、がんばれみたいな温かい気持ちが必要だ。

福祉の最後の授業では、お話をしてくれた方へ手紙を書いた。その最後に私はこう書いた。「これからもがんばってください。私もがんばります。」と。